読書メモ２０１８年１２月号

田中久美子監修『名画の読解力』

（MdN コーポレーション・2018 年 9 月）ほか

柳沢克央（やなぎさわかつひろ）　編

（信州・上田仮説サークル）

2018 年 12 月 16 日（日）

竹内三郎さんとの「感想戦」＆大望年会用レポート

◇はじめに ―

前回までの「読書メモ」と同様，サークルで発表することを目的とすると，読書がはかどるので，今回もこのメモを作成しました。自身のため，記録を残すことが第一目的です。みなさま，よろしく（適当に）おつきあい下さい。今までのものと同様に説明あり，引用あり，要約あり，感想ありで諸々が混交しておりますのでご注意を。（私物）と書き添えてあるもの以外はすべて屋代高校図書室蔵書。

今月も，とくに読書の秋にふさわしい重厚な作品群に出会うことができました。

◇今月（12 月）までに読んだ本

◎田中久美子監修『名画の読解力』（MdN コーポレーション・2018 年 9 月）

朝日新聞の広告を見て興味を持ち，屋代高校図書室にリクエストして購入してもらった。名画の鑑賞の基礎となる読解の仕方についての本。奥深い内容。ランダムに抜き書きするとたとえば先を知りたくなる書き方で大いに期待させる「はじめに」とそれに続

く読解法についての次のような内容。

＊

〈はじめに〉

絵画の楽しみ方はいろいろあります。描かれた人物のたたずまいに心惹かれ，陽光をあびて広がる清澄な風景に心洗われ，あるいは，カンヴァスの上ではずむタッチに目を奪われ，あでやかな色彩と線のリズムに感覚的な喜びを感じ……。おそらく本書を手に取る方は,そうした絵画を観る楽しみを充分に経験していらっしゃるに違いありません。

本書で取り上げるのは「物語を紡ぐ絵画」です。つまり，作品の背後に語られる物語があり，描かれた人物やモティーフに意味が託され，メッセージが込められている。わたしたちはそこに紡がれる物語を読み解いていくことを求められています。こうした絵画の見方を習得するのは少々やっかいで,時間のかかるものかもしれません。けれども，ひとたび，読み方を習得するならば，絵画作品はもっと深く私たちに語りかけ，知的な喜びと興奮を与えてくれます。

本書は 4 章から構成されています。まず第 1 章では美術史の時代変遷を，絵画を中心に解説します。歴史という大枠の中で美術の流れを一望し，みなさんの鑑賞力を鍛えるためのウォーミングアップを行います。「物語を紡ぐ絵画」といえば，やはり宗教画と神話画でしょう。キリスト教徒ギリシア神話は，西洋文化の根幹をなす二つの潮流です。ですから，第 2 章は宗教画を取り上げます。旧約聖書・新約聖書を典拠とするテーマを取り上げ，そこで紡がれるイスラエルの民の歴史とキリストの生涯を絵画作品で辿っていきます。第 3 章は神話を取り上げます。ギリシアの神々や英雄たちはどこか人間的で，笑いあり涙ありの物語を紡ぎます。西洋絵画の名品を堪能しながら，神話の物語を読み解いてゆきましょう。

「物語を紡ぐ絵画」には約束事がたくさんあります。そのひとつがアトリビュートです。登場人物が誰であるかを識別するためのトレードマークともいえるでしょう。作品の背後にある物語を知り，約束事を把握すれば，あたかも物語を読むかのように絵画を読み解くことができるようになります。また,「リンゴを手にした女性が旧約聖書に登場するエヴァなのか，神話のヴィーナスなのか」。そうした疑問にも答えてくれるはずです。

第 4 章はちょっと手の込んだ応用問題です。いろいろな「物語を紡ぐ絵画」を取り上げます。アトリビュートも登場すれば，抽象的な概念を人物像に託した擬人像も登場します。あるたけの知識をたぐり寄せ，手がかりを総動員しながら絵画を読み解きます。難解でスリリングな謎解きです。絵画作品の背後に，広く深い西洋の文化や歴史が凝縮

されていることに驚かれるでしょう。

さあ，本書をひもといて絵画を読み解く知的な楽しみを堪能してください。本書が読者の方々に，絵画をもっと深く理解し，もっと楽しむための手引きとなれば幸いです。

田中久美子

＊

〈登場人物はアトリビュートで特定できる〉

神話には数多くの神々，人間，怪物などが登場します。多くのエピソードを持った神や英雄もいます。第 2 章で紹介した，宗教画において描かれている人物が誰であるかを特定できるように用いられたアトリビュートは，神話画にも見られます。たとえばティタン神族のクロノスとレアの子で，オリュンポスの最高神となったゼウスのアトリビュートはいくつかありますが，代表的なものが鷲です。これは天地を支配していた父クロノス率いるティタン族に，ゼウス率いるオリュンポス神族が戦いを挑んだ際，飛んできた鷲がゼウスに勝利を予告したことから，ゼウスの使者や化身として描かれるようになりました。

「雷電」といわれる両端がやじり状に枝分かれした，あるいは炎の束として表された武器を手にしていることがあります。ホメロスの『オデュッセイア』によると，ティタン族との戦いでゼウスは燃え盛る雷電を投げつけたとあります。ちなみにこの雷電を作ったのは，クロノスの父ウラノス（つまりゼウスの祖父）によって地底に閉じ込められていた鍛冶が得意な神キュクロプスでした。

またゼウスは王の象徴として笏（しゃく）を持っていることもあり，いずれもゼウスであることを示すアトリビュートです。ゼウスは動物や雲，黄金の雨など，その姿は様々に変えますが，近くに鷲や雷電が描かれていればゼウスと特定することができる，というわけです。

ゼウスの妻ヘラは，頭に冠や飾りをつけている姿や，夫を魅了するために美の女神アフロディテ（ローマ神ではウェヌス）から借りた魔法の帯を締めた姿で描かれます。ヘラのアトリビュートのひとつ孔雀には次のようなエピソードがあります。

ゼウスに愛された美しいイオは，ヘラの怒りを恐れたゼウスによって牝牛に変身させられます。妻はその牝牛を疑い，百眼の巨人アルゴスに様子を見張らせますが，ゼウスは息子である伝令の神ヘルメスに命じて，アルゴスを殺してしまいます。ヘラはアルゴスの死を悼んでその目を孔雀につけたことから，神話では孔雀の羽は目のような模様になったと伝えられています。カラッチの《ユピテルとユノ》（ゼウスとヘラ）（図 3-1）

では，愛を交わすゼウスとヘラの姿が描かれています。ゼウスの足元には鷲がいて，その鷲が掴んでいるのが雷電です。ヘラの傍らには孔雀の姿があり，それぞれのアトリビュートが描き込まれているのがわかります。さらにはヘラはアフロディテから借りた帯を締めていることから，夫ゼウスを魅了しようとしていることが見て取れます。

このように神話画を鑑賞する際にはアトリビュートがどこに描かれているか，探してみるのもおすすめです。（183 ペ）

＊

…イエスの右胸（画面向かって左）に刺された傷があり流血しています。これは「一人の兵卒が槍でその脇を突き刺すと，すぐ血と水が流れ出た」（『ヨハネによる福音書』）という記述に依拠しています。キリスト教では右が「善」であるとされているので右に傷をつけられたのでしょう。同じ理由で，イエスの左右には同時期に磔刑に処せられた罪人がいますが，イエスから見て右側（向かって左）に救済される罪人，左側（向かって右）に救済されない罪人を配置しています。…中略…また，イエスから見て右側には嘆き悲しむ聖母マリアとそれを支える聖女たち，そして沈痛な面持ちをしたヨハネがいます。後ろには明るいエルサレムの街が見えます。

一方,イエスから見て左側にはイエスの衣装を分けるためにくじ引きに興じる兵士や,背景には枯れた木々の大地が広がっています。

このように中央のイエスを境に右と左では「善」と「悪」の世界が展開しているのです。この”**右側善説**”は最後に紹介する「最後の審判」でも見られますので，是非覚えておいてください。（168 ペ）

＊

166 ページでも述べた通り，右は善であり，左は悪でした。そして，キリスト教では山羊は淫欲を象徴する獣とされ悪であることから，左に分けられます。一方羊（特に子羊）は宗教的儀式で生贄（いけにえ）に用いられてきた動物で，キリスト教では犠牲的役割を担う象徴として，イエスの受難を連想させ，イエスの犠牲による人間の贖罪と，その恩寵を象徴するものとしてたびたび図像になりました。つまり羊は善的存在ですので，右です。このように善は右に，悪は左にと振り分けていくのが「最後の審判」です。「最後の審判」を主題にした美術作品の中でも有名なのが，ヴァティカンのシスティーナ礼拝堂の祭壇壁画《最後の審判》でしょう。これはミケランジェロの作品で総勢 400 名以上の人物をいきいきとしたタッチで描いています。

画面中央で右手を上げているのがイエスで，その隣には聖母マリアがいます。イエス

から見て右（画面向かって左）が天国に召される人で，左が地獄に落ちる人です。イエスの向かって右下には皮剥ぎの刑で殉教したといわれる聖バルトロマイの手から生皮がぶら下がっていますが，これはミケランジェロの自画像だといわれています。

また向かって右下では死者を小舟に乗せて地獄へ運ぶ様子が描かれています。その入り口で死者を地獄へ送っているのが，ギリシア神話に登場するミノスで，実在するビアージョ・ダ・チェゼーナという人物がモデルになっているといわれています。彼はローマ教皇に次ぐ権力を持っていた人物で，群像の中で裸体が多いことから性器を隠すようにミケランジェロを誹謗し，反感を買ってこのような姿に描かれてしまったというエピソードがあります。

新訳聖書は聖母マリアの処女懐胎に始まり，イエスの生涯を追い，受難からの復活という奇跡のエピソードを描きます。そしてイエスが再臨し，「最後の審判」という壮大なクライマックスで幕を閉じるのです。（174 ぺ）

＊

以前，サークルで話題になった right に関する記述があったので，念のため，抜き書きしてみた。これについての増田伸夫さんの見解が聞けるとうれしい。名画を解釈することの面白さ，奥深さについて知ることができて，有意義だった。最後にあと二カ所だけ引用して，この本を閉じることとする。

＊

…（フェルメールの寓意あふれる名画の解釈についてひととおり触れた後で）つまりフェルメールは本作で，画家という職業が教養深い職業であること，そして，歴史画を最高峰とする絵画芸術そのものを賞賛しているのです。…中略…このように舞台は日常的なシーンであり，一見するとただの風俗画のようですが，フェルメールが画中に込めｔた”遊び心”を読み解くと，一気におもしろくなるでしょう。一枚の絵を通して，300 年以上昔のオランダ人と同じ感覚を味わえる，これこそが絵画鑑賞の醍醐味なのかもしれません。（243 ぺ）

＊

第 4 章では 7 枚の名画を紹介し，その読み方を紹介しました。もちろん自分の感情の赴くまま，感覚的に鑑賞することも大事なことです。ですが，本章を通して，ちょっとした予備知識だけで，驚くほど絵画鑑賞が面白くなるという知的興奮を味わっていただけたのではないでしょうか。ぼんやり観るしかなかった絵画が，これまでとは違う表情を見せてくれるはずです。絵画を”観る”のではなく，”読む”という姿勢が，あなた

と名画との距離を近づけてくれます。数百年以上昔の画家たちが作品に込めた思いやメッセージを受け取るかどうかは，あなたの”読解力”にかかっています。（終）

◇次回以降の予告

◎小坂井敏晶著『社会心理学講義』（筑摩選書・2013 年）（私物）

◎『本多静六自伝・体験八十五年』（実業之日本社・1952 年初版・2016 年復刊）（私物）

◎半藤一利・出口治明共著『明治維新とは何だったのか』（祥伝社・2018 年）（私物）

◎牧衷著『寛容思想の成立と発展』（上田仮説出版・2018 年 7 月 30 日刊）（私物ガリ本）

◎本多静六著『人生計画の立て方』（実業之日本社・2005 年）（私物）

◎バーバラ・オークリー著／沼尻由起子訳『直感力を高める数学脳のつくりかた』（2016 年）

　著者は米国ミシガン州オークランド大学の工学教授。女性。私よりやや若いくらいの近影がカバーに印刷されている。

◎村上篤直著『評伝小室直樹』（下）（ミネルヴァ書房・2018 年 9 月

◎八代目桂文楽著『芸談あばからべっそん』（ちくま文庫・1992 年）（私物）

◎本多静六著『新版・本多静六自伝―体験八十五年―』（2016 年・実業之日本社）（私物）

◎森田敦史著『なにもしていないのに調子がいい』（クロスメディア・パブリッシング・2016 年）（私物）

◎板倉聖宣著『増補版・模倣と創造』（仮説社・1987 年）（私物）

◎マックス・ウェーバー著・中山元訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（日経 BP クラシックス・2010 年）（私物）

◎牧野雅彦著『新書で名著をモノにする「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」』（光文社新書・2011 年）（私物）

◎廣松渉・加藤尚武編訳『ヘーゲル・セレクション』（平凡社ライブラリー・2017 年）（私物）

◎文藝別冊『KAWADE 夢ムック・立川談志』（河出書房新社・2013 年）（私物）

◎立川談志著『努力とは馬鹿に恵えた夢である』（新潮社・2014 年）（私物）

◇まとめ･つぶやきなど

○「想像による自律」は「自立による創造」をもたらす。〔2018 年 12 月 2 日（日）9:35〕

○わが人生における「うど・蕗（ふき）」のポジションの変化。「俺には関係ないもの→一応食べられるもの→ないとものたりないもの→あと何回食べられるだろうか」

〇ひとつ，ふたつ，みっつ以上なら「たくさん」という考え方は地球人の特徴なのではないか。太陽・月・星々。
〇強酸・強塩基からなる正塩の液性は中性。強酸・弱塩基からなる正塩の液性は酸性。弱酸・強塩基からなる正塩の液性は塩基性。弱酸・弱塩基からなる正塩の液性は不定。これを馬鹿・利口について類推する。①利口が利口の真似をすると利口のまま。②馬鹿が利口の真似をするととても利口になる。③馬鹿が馬鹿の真似をすると馬鹿のまま。④利口が馬鹿の真似をするととても馬鹿になる。「アクティブ・ラーニング」は④のパターンに自ら突っ込む愚策に見えてならない。もちろん，現場はそんなことは百も承知で，きちんと良い意味で「手抜き」している。大切なのは「真に受けない」ことだ。
〇昔話「祖母と日の丸の歌，リコーダー演奏，小学校の先生の対応」から人生と社会について学んだ経験がなぜか記憶に残っている。そのときに本気で考えたことは記憶に残るようだ。
〇授業書の作り方。板倉さんはブラック・ボックスにしたつもりはなかったが，きちんと真似できる人が少なかったので，事実上ブラック・ボックスになっているのではないか。
〇老子・荘子の「小国寡民・七日にして混沌死す」は一つの理想なのではないか。〔以上，12 月 7 日（金）10:28〕
〇生徒からの質問に刺激されて数研出版の過去問データベースで検索してみて興味深いことが分かった。テーマは燃料電池の発電効率。細かな計算過程は省く。1993 年電気通信大の正解は 43%。2004 年京都大の正解は 67%。2009 年京都府立医科大の正解は 82%。2009 年東京理科大の正解は 54%（これが低いのが少し気になる）。2016 年早稲田大の正解は 83%。大まかに言えば，燃料電池の効率は大幅に改善されてきていると言って良さそうだ。電力会社はその存在意義が問われる時代に入ったと言えるだろう。「データベースは検索でこそその真価を発揮する」。板倉先生は『たのしい知の技術』（仮説社・絶版）の中で「数が出てくれば，私の勝ちだ」と書いている。類推して，「データベースは問題意識・目的意識を持って使った者勝ち」だと言いたい。あらゆる有効に活用できるデータベースを構築することが必要だ。燃料電池の普及スピードが割と遅いのは，なぜかと勘ぐってみたくもなる。太陽光発電や水力発電で水野電気分解を進め，水素として貯え，必要なところでこれを燃やして水にする技術はもっと普及させることができるはずだ。大手電力会社はその存在意義が根本から問われる時代に入っている。詳しくはナイターで。〔12 月 12 日（水）18:30〕

〇手書きメモから転載。組み合わせにオリジナリティあり。「食卓料理→主流，ジビエ料理→傍流」という考え方から，たとえば抜け出すために，ひとはジビエ料理を食べる…のかもしれない。
〇「七日にして混沌死す」『荘子』と山本夏彦「新聞の終末期」予言，2018 年，いま当たっていることが証明されつつある。
〇真似することは良いことだ。「読書メモ」と「プロジェクターでチョークアート」，模写，類推，仮説実験授業の方法論，「模倣と創造」。
〇メモの結びはなぜか都々逸「会の準備がほとんどできた明日になれば皆会える」〔以上，12 月 14 日（金）17:10〕

川村驥山の書「読書は心眼を開く」